

立命館大学の取り組み

—多言語共同プロジェクトの試み—

田原 憲和(立命館大学)・南谷 真紀(大阪府立長野高等学校)

1. はじめに

新学習指導要領では、資質・能力に関して知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう態度という三つの柱の育成を目指している。これらの実現のために、多くの学習現場においてパフォーマンス課題が導入されつつあるが、教育機関や担当教員により、パフォーマンス課題の内容、目標設定、学習のプロセス、評価方法などにばらつきがある。とりわけ英語以外の外国語教育の現場においては、その言語の授業を担当する教員の知識や経験、力量、学びの目標などの相違により、このばらつきはより大きくなっているケースが多い。

本プロジェクトでは、大阪府立長野高等学校での「教え合い授業」の実践と連携しつつ、逆向き設計の手法を用い、多言語共通パフォーマンス課題の実践に向けた枠組みづくりを目指した。¹

2. 概要

大阪府立長野高等学校国際教養科ではドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の4言語が提供されており、生徒はいずれか1つの言語を週2時間、2年間学習する。2021年度より取り組んでいる「教え合い授業」では、生徒は3名程度のグループとなり、他の言語を学ぶ生徒に対して5分間の授業を行うというものである。「教え合い授業」の準備にかけられたのは5時間程度と、決して十分なものではなかった。加えて、直前に休校なども重なり、十分に準備を終えた状態で当日を迎えられなかったグループもいた。

それでも、3年生は昨年度も同様の授業を経験していたことから、それぞれに工夫した授業を行なった。学習した内容を最大限に活用し、小道具なども使いながらインタラクティブな授業をしていたグループも目立った。加えて、この5分間で何を学ぶか、何を身につけることができるのかをはっきりと示していたグループも多かった。具体的な一例としては、「ドイツ語でさりげなくマウントを取る」(助動詞と対格表現を組み合わせた学習)、「恋愛疑似体験〜ドキッ!落ちちゃった…。恋の落とし穴〜」(助動詞と曜日や行き先などを組み合わせた学習)といったテーマを掲げていたグループもあった。

事後アンケートでは、「できる」ことの喜びを共有することができた、メンバー全員で助け合い、全員参加で教えることができたなど、全般的に好意的な意見が多く見られた。

¹ 本研究は令和3年度「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(グローバル化に対応した外国語教育推進事業)」の助成を受けたものです。

3. 今後の課題

今回の「教え合い授業」では各言語の選択している生徒数の相違により、同じ言語を学んでいるグループに対して「教え合い」をせざるを得ないケースも散見された。今後外国語選択の段階である程度均等になるように調整するか否かは学校全体として検討する必要がある。

また、今回初めて「教え合い授業」を行なった 2 年生は、次年度に地元の長野中学校での出張授業が予定されている。今回の「教え合い授業」での経験や反省点を踏まえ、早い段階から出張授業についても準備していきたい。

以上